

# 2024年度 入学試験問題

## 国語

### (第2回)

[注意]

1. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
2. 解答用紙は、問題冊子の中にはさんであります。試験開始の合図があったら、解答用紙を取り出して受験番号と氏名を記入し、QRコードシールをはりなさい。
3. 解答はすべて解答用紙に記入しなさい。
4. 問題冊子の余白等は自由に使って構いません。
5. 試験終了後、解答用紙のみ提出し、問題冊子は持ち帰りなさい。

東京都市大学附属中学校



【注意】国語の問題では、字数制限のあるものは、特別な指示がない限り句読点等も一字に数えます。

1 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

21世紀に入って「役に立つ科学」ということがしきりに強調されるようになりました。通常、「役に立つ」とはイノベーション（技術革新とそれに伴う生産・経営形態の更新）に大きく寄与するという意味であり、単純に言えば、経済の活性化に役立ち、金儲けにつながる革新的技術への貢献と言えるでしょうか。企業が新規事業を起こすことに力を尽すとか、企業が売り上げを伸ばして成長するのに役立つというふうに、科学が実利的な意味で役に立たねば意味がない、とまで言う人もいます。あるいは、「我々は霞を食べて生きているのではない」とか「誇りや倫理ではお腹が膨れない」と言い、実際の経済的な価値が生み出せない科学を否定する人もいます。むしろ、そのような人でも、問われれば「基礎的な研究が必要」とは言うのですが、それはすぐに応用され利益を生むものでなければならず、「いつまでも基礎研究だといって甘えていては困る」と念を押すのです。

基礎研究とは、モノになるかどうか分からない野心的なテーマに研究者が果敢に挑戦する研究で、そこからノーベル賞級の大きな成果が得られて成功することもあるけれど、何らアぼしい成果が得られず不成功に終わることもあります。というより、成功するよりも不成功である（あるいはごく小さな成功でしかない）方が圧倒的に多いでしょう。実際、多くの研究者がノーベル賞を目指して研究に勤しんでいますが、ほんの少数しか成功せず、ほとんどはたいした業績を残せずにいます。では、そんな研究はムダで無意味であり、研究者が多くいる必要はないのでしょうか？

そんなことはありません。研究において不成功であった場合も、大きな仕事に繋がらなかった場合も、やはり意味があるのです。次の世代の研究者が同じ失敗をせずに済むからであり、次の研究が成功するためのヒントを与えることになるからです。研究とは、いわば、まだ誰も通ったことがない荒野に道をつけて、なんとか目的地に辿りつこうとする行為のようなものです。その過程で研究者は、雑草を刈り取り、倒木を片付け、岩や石を取り除き、川があれば橋をかけ、というふうな作業を行っているのです。そのようにして、数多くの研究者がげもの道から徐々に人が通る道へと整備した結果、険しい断崖を越えて目的の豊穡の地に行き着いた最後の研究者がノーベル賞を獲得していると言えるのです。

その意味で、ほとんどの研究者はゴールまで長く続く道の一部を整備し、人が通れるように固めるという、地味で目立たない研究を積み重ねています。一見すると、たいした業績も出せず、研究の発展に役に立っていないように見えるので、研究費を出すのは無意味だと思いかもしれません。しかし、そう決めつけるのは正しくありません。研究の世界には、このような①小石を積

み上げるような粘り強い作業が不可欠なのですから。数知れない下積み努力があつてこそそのノーベル賞であるということなのです。

もう一つの基礎研究として、自然の法則や根本的な原理を追究する分野、つまり物質観・自然観・宇宙観など人間の文化のみに寄与する分野の研究があります。例えば、2002年に小柴昌俊氏がニュートリノの研究でノーベル賞を授与されたとき、記者から「ニュートリノは何の役に立つのですか？」と聞かれて、小柴氏はただ一言「<sup>②</sup>何の役にも立たない！」と返答されたそうです。ニュートリノは、太陽内部や星の最終段階から多数放出され、星の進化に影響を及ぼすことは理論的に予想されていましたが、私たちの生活に何かの役に立つとは考えられない粒子です。物質とほとんど反応せずにスカスカと通り過ぎていくため、幽霊のような粒子と言えるかもしれません。通常の検出器では捉えることができず、カミオカンデという巨大な水槽でやつと捕まえることができたのです。

このようにニュートリノはカミオカンデで実際に存在することが確認でき、その性質が調べられるようになって素粒子の理論が確立することになりました。その結果、宇宙を構成する上で不可欠な物質の一つであり、宇宙の進化に重要な役割を果たしていることが実証されたのです。

実際のところ、ニュートリノは、純粋に科学の世界でのみ非常に大切な物質ですから、まったく経済論理や商業的利用とは関係がありません。だからといって、「何の役にも立たない」と言い切ることはできませんね。科学のため、文化のために、ニュートリノ研究は「役に立っている」ことになりましたから。私は、これを「無用の用」と言っています。ある目的のためには役に立たない（無用）けれど、別の目的から見れば（異なった視点で見れば）役に立つ（用）という意味です。

科学研究の社会に対する役立ち方を考えてみましょう。

一つは科学・技術の効能について先に述べたように、それによつて人間の生活が便利で効率的になり、生産力が増大し、人々の暮らしが健康的で豊かになるということです。特に技術は人間の生活に密着した人工物を製作することが本来の目標ですから、技術の効能がより大きくなるためには人々の生活により役立たねばなりません。そして、当然、技術の発達による効能が経済的利得と結びつくことが求められます。要するに、儲かるための技術開発であることが、一般に受け取られている「社会の役に立つ」という意味になります。先のニュートリノに対する質問も、ニュートリノが遠隔通信に使えるというようなことを期待したのだろうと思われませんが、科学・技術の研究はこのように役立つことが当然と通常は考えられているわけです。

しかし、「役立ち方」はそれだけではありません。もう一つは、ニュートリノの研究がそうであったように、純粋科学や文化の創造に寄与するという役割です。私は常々「科学は文化である」とか「文化としての科学」と言っています。金儲けや経済的利得は「イ」の次で、人間の精神的活動としての文化の一つとして科学を考えています。モーツァルトの音楽もゴッホの絵画もロダンの彫刻もモリエールの演劇も、これらの芸術の成果は文化であり、「無用の用」と言えるで

しょう。これらが無くなっても私たちは生きていけるのですが、これがない世界は精神的に貧しくて空しく感じられるでしょう。「人間はパンのみにて生きるにあらず」で、物質世界から言えば「無用」ですが、精神世界には「用」なのです。

ここで「文化」というものが持つ意味を考えてみましょう。文化は人間の精神的活動の成果で、芸術のみならず芸能や学問や宗教や道徳などが含まれ、科学もその一つです。文化とは、「あることが大事で、無くなれば寂しい」というもので、基本的には個人の心を満たすためのかけがえのない先人の贈り物と言えるでしょう。

文化のための行為ですが、まったく個人のレベルに閉じているのが「趣味」です。切手集めや小石集めや貝殻集めなどの趣味は、通常は利益や見返りを求めず、自分が楽しければよいというものです。それが文化の発祥であり、それはとても大事な人間の営みなのです。西洋では、珍しい植物や動物や鉱物を蒐集する趣味から、やがて蒐集物の共通する部分と異質な部分に着目して分類するという「博物学」になりました。さらに、その各々の分野が独立して植物学・動物学・鉱物学というふうに分科して「科学」へと発展しました。その意味では、科学は趣味に出自（生まれ故郷）を持つ個人の楽しみであったのです。

趣味と文化の決定的な違いは、趣味は個人だけの楽しみですが、文化は社会性があるということです。つまり文化は多くの人々の支持によって広く共有されるものだということです。だから、文化は人々の支えによって維持できるもので、税金が使われたり、浄財で賄ったり、対価を求めたり、ボランティアの助けを得たり、というような形で社会と結び合うことになります。文化が健全に育ち社会に生き続けるためには、個人の努力と社会の受容が両輪とならねばならず、蓄積と発展のための努力が個人及び社会の双方に求められるわけです。こう考えると、文化こそ社会に生きる人間的行為であると言えるでしょう。私が「文化としての科学」と言うとき、科学は商売や経済の手先になるのではなく、「文化としての科学こそ人間の証明」であるということをお願いいたします。

他方、多くの科学者は、文化としての科学という抽象的な概念だけではなく、いつの日かそこから新しい技術が開発され、人々の生活に役立つようになると考えています。これが基礎研究の第三の「役立ち方」で、今はまだ何の役にも立たない純粋な基礎科学だけれど、そのうちに技術と結びついて、実際の物質に活用できるようになり、私たちの生活を豊かにするに違いない、と信じているのです。だから、焦らず長い目で見守って欲しい、と願っています。今確実に役に立つようになるとは言えないけれど、過去を振り返ってみれば何度もそんなことがあったのだから、またいつの日かそうなるだろう、という気持ちを持っています。

例えば、電子や原子の運動を記述する量子力学は、最初は人間の生活とは縁がない極微のマイクロ世界の基礎的な物理法則でしかないと思われていました。しかし、1950年頃から、IC（集積回路）の発明を通じてコンピュータを動かす上での作動原理であり、X線や電子や陽子を用いた病気の治療や物質の診断に応用するための動作規則として働き、原子・分子レベルでの物質

の振る舞いを記述しており、さまざまな新物質を作り出すための基本法則である、というふう  
に今や量子力学を抜きにしては成り立たない分野が数多く拓かれてきました。

(中略)

このように、基礎科学として始まった分野であったけれど、広い範囲に応用分野が展開し、人  
間の生活に大きな影響を与えるようになったことが何度もありました。科学者は「いずれ役に立  
つから」と人々や政府に期待を持たせて、研究費を保証するよう求めているのです。

これとは対照的に、日本の産業力の活性化のためだとして、政府や産業界は大学に基礎研究を  
すつ飛ばして、直ちにイノベーション(技術的革新)の種を提供するようしきりに要求していま  
す。しかし、いくらイノベーションの掛け声をかけ研究費を投じてでも、最初からイノベーシ  
ョン狙いの研究は底が浅く、たいしたものはないまま生まれません。遠回りのように見えるけれど、  
「いつか役に立つ」としか言えない基礎研究から始めた方がよいのです。「ウ」  
言葉があるように、近道をしようとする、かえって道がわからなくなることが多く、基礎研究  
という遠回りに見える道を選ぶ方が得策なのです。

その意味で、基礎研究の第四の「役立ち方」があります。最初は実験段階で企業化や商業化は  
とても無理だけれども、じっくり時間をかけて基礎的な実験を積み重ねて技術開発に繋げていく  
という方法です。この場合、取りかかった時点では困難な技術で簡単に応用できそうにはないけ  
れど、「いずれ役に立つ」との信念の下で、慌てずに基礎研究に没頭する、というものです。

その一例として、日本の企業が行った半導体のCCD(電荷結合素子)の開発があります。光  
を照射すると電子が飛び出してくる光電素子で、電子の輸送法を工夫して、素子のどの部分に、  
どのような色(波長)の光が、どのような強度で当たったか、をコンピュータで割り出せるよう  
に工夫したものです。その結果、碁盤のようにCCDを縦横に格子状に並べた版上に像を撮るこ  
とができ、それを刻々とコンピューターに記憶することでデジタル撮影が可能になりました。素  
子の感度を上げることによって弱い光でも像が撮れ、格子上の網目(メッシュ)の点の数を増や  
して詳細な像が撮影できるまでに進歩させました。この可視光用のCCDを世界で最初に作った  
のは日本の企業で、ケータイのカメラなどに使われ、一時世界のカメラ市場を制覇しました。C  
CDの開発段階ではほとんど成功の見込みはなく、投資のムダではないかと非難されたのですが、  
その困難を乗り越えて成功したのです。

(中略)

以上のように、当面の効用が第一で科学・技術が直ちに役に立つことを追求するよりは、長い  
目で見て基礎的な研究からしっかり積み上げていく研究が重要であることがわかると思います。  
大学等の研究者はこのような信念を持っている人が多く、そのような科学者を大事にすること  
こそ、<sup>⑥</sup>科学・技術を進めていく上での決定的なカギであるのです。ともすれば、近視眼的にすぐ  
に「役立つ」ことを求めたがるのですが、それではかえって大きな成功を逃すことになるのでは  
ないでしょうか。

また、科学の文化的な価値を大事にし、科学がもたらす新しい物質観や世界観を学び直し、より深く自然を理解することが科学の重要な役割であることを忘れてはなりません。科学・技術を通常の企業活動と同じとみなし、投資を集中すれば成果が上がるとする考えでは、本当のイノベーションに結びつかないでしょう。根本から問題を見直し、長い目で見てじっくり育てていくという姿勢こそが、科学・技術の育成に求められているのです。

(池内了『なぜ科学を学ぶのか』より)

問1 空らん  ・  にあてはまることばを、それぞれ漢字一字で答えなさい。

問2 ——線①「小石を積み上げるような粘り強い作業」とありますが、どういうことですか。最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 危険が伴い手を出すのがはばかられる実験に、安心して取り組ませること。
- 2 名声や確かな成果は保証されないが、次の研究の成功を支えていくこと。
- 3 先行する研究よりも、ほんのわずかな成功を期待して行われること。
- 4 大した業績も出せず、研究の発展に寄与しない研究を諦めずあきらに続けること。

問3 ——線②「何の役にも立たない」とありますが、この小柴氏の発言にはどのような意味がありますか。最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 実利的な成功だけを追い求める人たちを説き伏ふせる力を持つものではないという意味。
- 2 世間からたたえられたり、今後の基礎研究の成功を支えるものではないという意味。
- 3 人類をとりまく自然や宇宙がどんなものかを解き明かすものではないという意味。
- 4 経済全体の活性化や、企業の金儲けにつながっていくものではないという意味。

問4 ——線③「人間はパンのみにて生きるにあらず」とありますが、このことばと対応する表現をふくむ一文を文中からぬき出し、はじめの五字で答えなさい。

問5 ——線④「文化」、——線⑤「趣味」とありますが、本文における「文化」や「趣味」に関する説明としてふさわしくないものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

1 文化は芸術・芸能・学問などを幅広くふくむ人間の精神活動の成果であり、科学もその一つであると言える。

2 趣味は文化の発祥になる可能性を持っているが、社会性を伴わず完全に個人のレベルに閉じているものである。

3 初めは個々人の趣味でしかなかった植物学・動物学・鉱物学が、多くの人々の支持によって博物学という文化に発展していった。

4 個人の趣味を超えて社会性を獲得した文化を維持するためには、個人の努力だけでなく社会の受容も不可欠である。

問6 空らん  にあてはまることわざを考えて書きなさい。

問7 ——線⑥「科学・技術を進めていく上での決定的なカギ」とありますが、筆者の「科学・技術」に対する考えに最も近いものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

1 基礎的な研究を積み上げた先にある経済的な価値を目指し、強い信念を持った科学者たちを長い目で見てゆつくり育て上げることこそが、科学・技術の未来を守っていく。

2 企業が追い求めるイノベーションにとらわれることなく、文化的な価値を創造することこそが、科学・技術を進めていく上での大きな成功とみなすことができる。

3 科学・技術はお金をかければかけるほど成果が出るものではなく、目先の利益をあげるよりもじっくりと自然を理解することこそが、科学・技術の進歩につながっていく。

4 科学がもたらすあたらしい物質観や世界観を企業活動に取り入れ、イノベーションのあり方を根本から見直すことこそが、科学・技術の発展に不可欠である。

問8 この文章の表現に関する説明として最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 ノーベル賞受賞者のエピソードを挿入することによって、「科学がどう役に立つか」に対する考え方の違いを浮き彫りにしている。
- 2 「イノベーション」ということばを随所にちりばめることによって、筆者がこの文章で伝えたいテーマを明確にしようとしている。
- 3 全体を通して「です・ます」調で書くことによって、一部の人間しか理解できないような科学の問題を理解してもらえよう努めている。
- 4 「〜でしょうか?」「〜でしょう。」など、明言を避けることによって、筆者の主張が絶対的に正しいわけではないとほのめかしている。

(問題は次のページに続きます)



2 次の文章は竹西寛子の小説「蘭」の全文です。これを読んで、後の問いに答えなさい。

列車の中は、<sup>※</sup>国民服や<sup>※</sup>モンペ姿の人達で混み合っていた。立ったままで座席に寄りかかっている者がある。通路に荷物を置いてそれに腰を下ろしている者もいる。

暑い。すでに西陽の時刻でもあった。

二人掛けの座席はいたるところで三人掛けになり、窮屈そうに身を寄せ合った乗客が、霽れない顔付きで扇子や団扇を使っている。網棚の荷物をしきりに気にしている老婆は耳が遠いらしく、隣の男に、この次はどここの駅かと大きな声でたずねていた。

窓際の席で父親と対い合っているひさし少年は、頑丈そうでもないからだを腰板に押しつけられながら、さつきから<sup>①</sup>歯の痛みをじつと休えているのだが、こんな時は、遠くの席の赤ん坊の泣き声まで耳に立った。

小学校も最後の夏休みに、父親の出席する葬儀について行ったのはいいけれど、帰りの列車に乗ると間もなく、思いがけない歯痛になった。いつ父親に言い出したものかと、周囲の乗客にも気兼ねして、すつかり固くなっている。

父親は、扇子を片手に握りしめたまま、反対の手で、時々、胸のポケットからハンカチーフを取り出して額の汗を押えていた。家にいる限り、暑さを訴えることも、寒さを訴えることも滅多にない父親であるが、その父親がこの車内の暑さを耐え難く思っているのはほかでもない。平素着馴れない国民服というものを着用しているのと、列車の窓に<sup>※</sup>錠戸が下ろされているためだった。

列車は、内海に沿って東に走っていた。

しかし、この鉄道の沿線にはずっと軍需工場が続いているので、乗客はその地域を通る間中、どんなに暑くても当局の命令通り窓に錠戸を下ろさなければならなかった。

見るからに暑苦しいカーキ色の服の襟元を詰めて、わざと風通しを悪くした部屋でゆるい<sup>□</sup>をされているような時間が、さすがの父親にも耐え難く思われた。

戦争をする相手の国が増えて、質素と儉約の生活を政府がすすめるのと見合うように、近郊へ買い出しに出掛ける人の数も次第に増えている。現にこの車輛の網棚の荷物も半ばは大きなリュックサックで占められていた。通路も塞がっているので、互に気軽に洗面所へ立つことも出来ない。

ひさしには、座席にいて見渡せる乗客のどの顔も、一樣に不機嫌そうに見えた。自分の痛みが嵩じると、人々の不機嫌も嵩じる<sup>ア</sup>ように思われた。

父親は、工場を休んでの葬儀への出席だった。離れた土地にまでわざわざ一人息子を伴う気になったのは、長い間、親戚以上の懇意で頼り合った同業の故人に、ひさしが格別可愛がられていたのも理由の一つだが、この時勢では、息子を連れて旅する機会も、これからはなくなるだろうという見通しもあったことだった。しかし<sup>②</sup>それだけは、ひさしにも、母親にも言わなかった。

何年か前までは、家族で避暑地に滞在する生活もあった。けれども父親の見る限り、再びそうした生活に戻るあてはなく、工場での働き手も、一人、また一人と兵役に抜き取られて、次々に戦場に送られていた。工場の規模でさえ、否応なしに縮小を迫られる日のそう遠くはないことも、この父親にはすでに充分予感されていた。

父親は、ひさしを伴うのに、葬儀という名目があつてむしろよかつたと思つた。それで、葬儀が終ると、予め頼んでおいた店に寄つて、ひさしに好物の水炊きを食べさせた。

店と言つても、表に看板も掲げていない。仕舞屋ふうの造りである。この女将と亡くなつた人とが普通の親しさではなかつたところから、父親はそれまでも幾度かこの店に案内されていたが、水炊きのよかつた記憶がひさしに繋つて、無理を承知で頼んでみた。

ひとしきり思い出話に涙を拭き続けた女将は、こんな時ですから、材料も大つぱらには手に入りませんし、板前も兵隊さんに取られてしまつて、いつまで営業出来ますやらと言いなから、それでも贅沢な食卓をととのえてくれた。父親はちよつと箸をつけただけで専ら酒をふくみ、ひさしの食欲を満足そうにながめていた。

ひさしは、初めて会つた女将の物言いや仕種を見て、他人の死をこんなにまでかなしむのは、きつと優しいひとに違ひないと思つたが、そのうちに、そのかなしみの一と通りでない様子から、自分を可愛がつてくれた人の今まで知らなかつた一面を、それとなく知らされもした。

あの小父さんは、自分はさきにさようならしたからいいようなものの、この女のひとはこれからどうやって生きていくのだろう。今日という日に、大事な人のお葬式にも出られないで、同じ土地にひっそり働いている女のひとを知つたことが、ひさしに、漠然とながら人生の奥行きのようなものを感じさせた。

玄関を出る時、女将は父親に、あまり遠くない時期にぜひもう一度おたずね下さいと言ひ、父親が女将に、あなたもどうぞ気を強く持つて下さいと言ひているのをひさしは聞いた。ひさしは、今自分がこの女のひとのために出来るのは、心からお礼を言うことだけだと思つたので、父親のそばからただ一と言ひ、

③「ありがとうございます。」

と丁寧と言つて頭を深く下げた。

町中の掘割を、静かな音を立てて水の流れている町だった。あの世へ旅立つたばかりの人が、今にも後から追つて来そうなの掘割のそばを、父親はもう二度と通することもないだろうと思ひながら、一歩一歩を踏みしめる。ように、黙つて駅に向かつていた。

父親が黙つているので、ひさしも黙つて少し後から歩いてきた。靴をはいた父親の歩き方は、和服に下駄の普段の歩き方よりも、ずつとぎこちなくひさしには見えた。

帰りの列車に乗ると間もなく始まつたひさしの歯痛は、時間が経つてもいつこうに薬にはならなかつた。少し前に続けていた治療の際の詰物がとれて、そこに何かの繊維がきつくくい込んだらしい。治療の半ばでほうり出したことも悔まれる痛み方だった。

対いの席で時々額の汗を押えていた父親は、いつの間にか目を閉じていた。隣の老人に倚りかかられて、心持ちからだを斜に倒している。ひさしの周囲で不機嫌そうな顔をしていた大人達も、列車が走り続けるうちに、振動にまかせて一様に首をかしげ、一様に目を閉じていた。

何とか我慢しよう、とひさしは思った。父親に訴えたところで、父親も困るだろう。楊枝もなければ痛み止めの薬があるわけでもない。ところが、改めてあたりを見廻してみても、目覚めているのがどうやら自分一人と分ると、痛みは耐え難くついつてきた。窓の外の景色に気を紛らせるというわけにもいかないし、嗽に立つことも出来ない。

ひさしは、眠っているらしい人達に気を遣って声を立てず、指で父親の膝をつついた。驚いて目を開いた父親に、ひさしは片頬を片手で押えて、しかめっ面をしてみせた。

「歯か？」

と即座に父親は反応した。眉の間に皺を寄せたままひさしはうなずいた。

父親は、困った、という表情になったが、困った、とは言わなかった。その表情を見た途端、ひさしは、

「何か挟まっているみたいだけど、大丈夫、取れそうだから。」

と言ってしまった。取れそうな気配もなかった。

今度はひさしのほうが目を閉じた。あと一時間半の辛抱だ。そう自分に言いきかせて、自分の手をきつく抓った。

いつときして目を開くと、父親が思案顔で見詰めている。

「まだ痛むか？」

ひさしは、息を詰めたくなるような痛さにいつそう汗ばんでいたが、

「少しだけ。」

と答えた。

すると父親は、手にしていた扇子を開きかけ、いきなり縦に引き裂いた。そして、その薄い骨の一本を折り取ると、呆気にとられてひさしの前で、更に縦に細く裂き、

「少し大きい、これを楊枝の代りにして。」

と言って差し出した。

ひさしは、頭から冷水を浴びせられたようだった。その扇子は、亡くなった祖父譲りのもので、父親がいつも持ち歩いているのを知っていたし、扇面には、薄墨で蘭が描かれていた。その蘭を、いいと思わないかと言ってわざわざ父親に見せられたこともある。

ひさしは、

④「蘭が……」

と言ったきり、あとが続かなくなった。

父親に促されるまま、ひさしは片手で口を蔽うようにして、細くなった扇子の骨を歯に当てた。熱が退くように、痛みは和らいでいった。ひさしから痛みが消えたのを見届けると、父親は

ハンカチーフでゆつくり顔をひと拭きした。それからまた、元のように目を閉じた。

ひさしは、自分の意気地なさを後悔した。

父親が惜し気もなく扇子を裂いてくれただけに、責められ方も強かった。うれしさも、ありがたさも通り越して、何となく情なくなっていた。

しかし、ひさしはその一方で、ずっと大切にしてきたものを父親に裂かせたのは、自分だけではないかもしれないとも思い出していた。はつきりとは言葉に出来ないのだが、決して望むようにはなく、やむを得ない場所で否応なしの勤めをさせられているように見えるこの頃の父親を、ひさしは気の毒にも健気にも思い始めていた。

静かな音を立てて水の流れる掘割のそばを、ぎごちない足どりで駅に向かっていた父親の背が、対いの席で目を閉じている父親に重なった。今頃あの女のひとはどうしているだろう。列車の振動に身をまかせて、<sup>⑤</sup>ひさしもやがてゆつくりと目を閉じた。

※国民服……戦時中、日本国民の男性が常用すべきものとして定められた、軍服に似た服装。

一九四〇年に制定された。

※モンペ……腰、膝まわりにゆとりを持たせ、裾を細くしぼった形のズボン状の衣服。もとは農山村の労働着。戦時中に女性の標準服として広まった。

※鎧戸……直射日光を防ぎ、通風を保つために、幅の狭い横板を一定の傾斜・間隔で何枚も取り付けた戸のこと。

※水炊き……鶏肉や野菜を出汁湯で煮、ポン酢醤油などをつけて食べる鍋料理。

※仕舞屋……町中にある、商家ではないふつうの家。もとは商売をやめた家の意。

※女将……料理屋や旅館などの女主人。

問1 ——線ア～エの「よう」をふくむことばのうち、意味・用法の異なるものを一つ選び、記号で答えなさい。

問2 ——線①「歯の痛み」に関する表現は、この文章ではどのような働きをしていますか。その説明として最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 物語の展開を予感させる暗示的な表現として用いられ、急激な場面の転換をあらかじめそれとなく読者に伝えることで、本文を読みやすくしている。
- 2 物語の中の事件を時間の流れの順に整理する役割を果たしながら、主人公の複雑な心理・心情を痛みの変化で示すことで、読者の想像力をかき立てている。
- 3 物語の流れと主人公の心情の変化をつなぐ役割を果たし、主人公が時代の波に翻弄されていることを痛みという具体例で明示し、読者が読みまちがえないようにしている。
- 4 物語のはじめからクライマックスまでの展開を導く仕掛けであるとともに、主人公の心理・心情を読者にわかりやすく伝え、共感を呼びやすくしている。

問3 空らん  にあてはまることばとして最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 手錠
- 2 目隠し
- 3 さるぐつわ
- 4 耳せん

問4 ——線②「それだけは、ひさしにも、母親にも言わなかった」とありますが、それはなぜだと考えられますか。最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 戦局の悪化とともに暮らしの自由がますますきかなくなっていくことに父親は気づいているが、それを口にしたら家族に心配をかけてしまうから。
- 2 戦局の悪化を仕事で知っている父親は、そのことを家族に言っただけで済ませたら後で責任をとらなければならなくなることを恐れているから。
- 3 戦局の悪化は何年も前から予測できたことではあるが、そのことを実感できない家族には説明しても仕方ないとあきらめているから。
- 4 戦局の悪化はすでにだれの目に見ても明らかであり、そのことを家族に言えばいままさ何と言っているのかとばかにされてしまうから。

問5 ——線③『ありがとうございました。』とありますが、この時のひさしについての説明

として最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

1 父親は困っているであろう店の女将の助けになればと思つてひさしを連れてきたのだが、ひさしには女将が困っているように見えなかった。大人には子どもが理解できない側面があるのだと知り、あたりさわりのない言葉であいさつをした。

2 父親は親しくしていた同業者の死を悼むついでにひさしを店に連れてきたのだが、ひさしはこの一件で急速に成長することができた。他人を大事にする大人の人間関係を知ったひさしは、実に適切な言葉で女将をほげますことができた。

3 父親はもう二度と会えなくなるだろう店の女将に別れを告げに来たが、ひさしははっきり言えない父親の姿に人生の難しさを読み取った。父親の代わりに何かを言わなければならぬと思つたが、ひと言お礼を言うのが精いっぱいであつた。

4 父親は純粹にひさしを喜ばせようと思つて店に連れてきたのだが、ひさしは大人には微妙な人間関係があることに気づいてしまった。しかし、ここで言うべき言葉が出てこなかつたため、できる限り気持ち伝わる言葉を選んで言つた。

問6 ——線④『蘭が……』とありますが、この前後のひさしについての説明として最もふさ

わしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

1 父親は思案顔をしていたのである程度予測のできた行動だったが、それでもいざそうなつてみると自分にも責任があると思ひ、我慢しなかつたことを後悔した。

2 父親の性格からすれば十分に可能性のある行動ではあつたが、実際にこのような場面に会つたと元気を失うことになり、我慢しなければという気もなくなつた。

3 思いもよらない父親の行動を見て驚いたが、それが自分のためだと気づき、とんでもないことをしてしまつたと思うとともに、我慢が足りなかつた自分を責めた。

4 大事にしてた扇子を引き裂くほどおかしくなつてた父親を見てショックを受け、言葉の失うとともに、我慢してた痛みもどこかへ行つてしまつた。

問7 ——線⑤「ひさしもやがてゆつくりと目を閉じた」とありますが、その説明として最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 父親の怒りは戦争を始めた国の指導者たちに向けられているが、その感情を押し殺して耐えている父親の強さをひさしは感じ取り尊敬している。
- 2 親しい知人や大切なものを戦争で次々と失ったことによるやりきれなさを隠せない父親を見て、ひさしは親の老いに悲しい思いをしている。
- 3 世の中は美しいものを保つことすらできないほど行きづまり、そこで窮屈に生きる父親の姿にひさしは子として複雑な思いを抱いている。
- 4 すでに敗戦が濃厚な状況を今回の遠出で感じとり、自暴自棄になっている父親や世の中の人々の姿に不安を感じたひさしは弱気になっている。

問8 この文章の表現に関する説明として最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 登場人物の心中まで語り手に語らせることで、読者はこの後に訪れる歴史上の出来事を想像しつつ、その時代を生きる家族の物語として読むことができるようになっていく。
- 2 父と子の会話を中心しつつ、そこにほかの登場人物の会話加わって構成され、読者は人物の表に現れない心理・心情を想像しながら読むようになっていく。
- 3 主人公の語りとともに物語が進行しているため、主人公がわかっている範囲のことだけが語られており、書かれていないところは読者が補うようになっていく。
- 4 複数の出来事が複雑に絡み合った物語の筋が、舞台を見下ろすような視点を持った語り手によって語られることで、読者の想像力をかき立てるようになっていく。

(問題は次のページに続きます)



3 次の詩を読んで、後の問いに答えなさい。

ピヤホールで 黒田三郎

沈黙と行動の間を

□ のように

かるがると

美しく

僕はかつて翔んだことがない

黙っておれなくなつて

大声でわめく

すると、何か①が僕の尻尾を手荒く引き据える

黙っていれば

黙っていればよかつたのだと

何をしてても無駄だと

白々しく黙りこむ

すると、何か①が乱暴に僕の足を踏みつける

黙っている奴があるか

一步でも二歩でも前に出ればよかつたのだと

夕方のピヤホールはいっぱいのひとである

誰もが口々に勝手な熱をあげている

② そのなかでひとり

ジョッキを傾ける僕の耳には

だが何ひとつことばらしいものはきこえない

たとえ僕が何かを云つても

たとえ僕が何かを云わなくても

それはここでは同じこと

③ 見知らないひとの間で心安らかに

一杯のビールを飲む淋しいひととき

僕はただ無心にビールを飲み

都会の群衆の頭上を翔ぶ

一匹の紋白蝶を目に描く

彼女の目にうつる

はるかな菜の花畑のひろがり

(『ある日ある時』より)

問1 第六連に用いられている表現技法として最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 倒置法      2 省略法      3 体言止め      4 直喩

問2 空らん  にあてはまる最もふさわしいことばを詩の中から五字以内でぬき出しなさい。

問3 二つの——線①「何か」が指すものとして最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 内なる「僕」      2 熱をあげる人々      3 没個性な群衆      4 美しい紋白蝶

問4 ——線②「そのなかで……きこえない」はどのようなことを表していますか。最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 ビヤホールの人々が発している「ことば」は、「僕」にとって意味のあるように聞こえるものではないということ。
- 2 ビヤホールでさかんに話す人々の「ことば」は、自分勝手にひとりよがりな内容のものばかりであるということ。
- 3 ビヤホールで熱をあげている人々の「ことば」は、各々が好き勝手なタイミングで話すため雑音にしか聞こえないということ。
- 4 ビヤホールで心安らかにビールを飲みたい「僕」が、人々の発する「ことば」を拒絶しているということ。

問5 ——線③「見知らない……ひととき」はどのようなことを表していますか。最もふさわし

いものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 顔見知りの相手の機嫌きげんをうかがわなくてよい気安さと、かるがると会話の輪の中に入ることのできない物足りなさを「僕」が同時に味わっているということ。
- 2 自分の行いがだれにも妨げさまたられない開放感と、あらゆる発言が無視むしされることに対する疎外感そがいを「僕」が同時に味わっているということ。
- 3 好みのビールをじっくりと味わえる安心感と、無心でビールを飲むことしかできないむなしさを「僕」が同時に味わっているということ。
- 4 自分の言動に気をつかわなくてもよい気楽さと、その言動が他者に影響えいきょうを及ぼおよすことのない孤独こどくさを「僕」が同時に味わっているということ。

4 次の各問いに答えなさい。

問1 次の各文の——線のカタカナを漢字で書きなさい。

- 1 世界遺産の壁画を定期的にシユウフクする。
- 2 来月からマンションのヤチンが上がる。
- 3 健康を意識してスーパーでザツココ米を買う。
- 4 インフルエンザの予防セツシユを受ける。
- 5 手芸のためにキヌイトを用意する。

問2 次のI～Vの文章には本来の言い回しから外れた部分がそれぞれ一つずつあります。その部分を解答らんの文字数でぬき出し、本来の言い回しに直して答えなさい。

- I トシコー野球部では、毎年主将を監督の推せんによって決めている。監督は今年の新チームの主将としてAくん在白羽の矢をさした。主将となったAくんは必死にチームをまとめ上げようとするものの、チームの士気は上がらず、選手たちの気持ちはバラバラのままであった。
- II そのような状況の中で新チームでの最初の大会を迎えた。トシコー野球部は対戦相手のライバルチームと接戦を演じていたが、終盤にAくんがミスをしてしまい負けてしまった。Aくんは自分が主将として役不足であるように感じ、主将を降りようとするが、監督はAくんが主将を続けるべきだと説得をした。

III 監督の説得により、主将をもう少しだけ続けることに決めたAくんは、次の試合では今回の試合の二の舞を踏まないようにしようと心に固く誓った。この日から、Aくんは雨が降る日でも風が吹く日でも練習を欠かさなかった。

IV 熱にうなされたようなAくんの姿を見た他の選手たちにも気持ちの変化があらわれ始めた。それに伴い、チームの士気も徐々に上がってきた。チームはAくんを中心として、寝食も忘れるほどに練習に明け暮れた。

V 厳しい練習に耐え抜いた選手たちは、今までにないほどに団結力を高めることができた。半年後に行われた大会では、見事ライバルチームに雪辱を晴らすことができ、そのままの勢いでチームは優勝した。Aくんは最後まで主将としての責務を全うした。





